

九州大学文学部所蔵中国古籍について

周, 彦文
台湾淡江大学

横山, 裕

<https://doi.org/10.15017/18141>

出版情報：中国哲学論集. 19, pp.70-76, 1993-10-10. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

九州大学文学部所蔵中国古籍について

周

横山

彦

裕
訳

文

一 前 言

九州大学は歴史ある大学であり、そこに収蔵されている中国古籍も十分に豊富である。そのなかで文学部の書庫に収蔵されるものに就いて論ずると、清末以前（西暦一九一一年を下限とする）に出版されたものが約千四百部あり、このうち明版は十分の一強、約百四十部あつてそれ以外は全て清版である。⁽¹⁾

文学部の書庫には全く宋元版の書籍を見ることが出来ないが、そもそも各図書館の機能はそれぞれの図書館において異なり、また善本古籍収蔵を本来の目的としない大学の学部図書館であることを考慮すれば、上記した数だけの明清版を収蔵していることは容易ならざることである。この他、古版朝鮮刻本、和刻本及び現代の書籍を併せ見れば、九州大学文学部の中国学関係の蔵書は洋々大観たりと称することが出来る。

二 蔵書の類別と種類

『四庫全書總目』の分類法に依つて九州大学文学部の中国古籍（清末以前の刊本）を分類すると、その分類と種類は以下の表の如くである。

史 部												經 部						部 名		
職 官	地 理	時 令	載 記	史 鈔	傳 記	詔 令 奏 議	雜 史	別 史	紀 事 本 末	編 年	正 史	小 學	四 書	五 經 總 義	春 秋	禮	詩	書	易	類 名
3	417	1	2	1	39	10	18	29	6	30	27	37	12	27	7	13	23	11	6	部 數

集 部					子 部														
詞 曲	詩 文 評	總 集	別 集	楚 辭	道 家	釋 家	小 說 家	類 書	雜 家	譜 錄	藝 術	天 文 算 法	醫 家	法 家	兵 家	儒 家	史 評	目 錄	政 書
24	13	57	186	9	13	10	28	22	115	4	6	2	1	4	4	35	7	46	25

この分類表について見れば、史部の書籍が計六六一種あり最も多く、次いで集部が計二八九種、その次に子部が計二四四種、最も少ないのが経部で一三六種有るのみである。類別について言えば、地理類の書籍が最も多く計四一七種、次いで集部が計一八六種、その次が雑家類で計一一五種、その他は全て数十種以下である。⁽²⁾

三、分類統計表と蔵書の特質との関係

しかしながら、この統計表の数字は九州大学文学部の教官及び学生の蔵書利用状況を示すものではなく、この数字からはその実情を窺い知ることは出来ない。例えば、その蔵書中最も多くを占めるのは、地理類の地方志であるが、これによって九州大学文学部の教官及び学生が最もよく地方志を利用しているとは決して言えず、むしろ地方志の研究は九州大学文学部では盛んではない。地方志に記されている購入年を見ると、それらの大部分が昭和元年から昭和二十年（西暦一九二六年～一九四五年）の間に購入されたものである。その中でまた昭和十年頃購入されたものが最も多い。この時期は、ちょうど帝国日本によって中国侵略が最も積極的に行われた時期にあたる。購入された地方志は、それによって中国の地理、風土及び民情を理解するためのものであり、これは日本軍閥による中国侵略の手段の一つである。⁽³⁾従ってこれらの地方志収蔵は学術的な理由によるというよりは、むしろ歴史的な産物であると言える。少なくとも収蔵された地方志と文学部各学科の現在の研究分野とは全く関係はないのである。

またこの分類統計表自体も、九州大学文学部書庫の蔵書の特徴を表しているとは言えない。中国哲学史研究室を例にとつてみると、この研究室は宋明理学研究の重鎮であり、かたや研究は先秦諸子にも及んでいる。これから考えると、この分類統計表上に子部や哲学方面に属する書籍を多く見るはずであるが、しかし、この表中の子部儒家類の蔵書はわずかに三十五種あるのみである。また雑家類に百十五種見ることが出来るが、『四庫全書總目』の分類基準で諸子学の「雑学之屬」に属する書籍は、二十種にも満たない。⁽⁴⁾これだけから見るとすれば、この書庫は上述の学術範疇の書籍をあまり収蔵していないように思われる。しかし、実情は決してそうではない。実際、この書庫には先秦諸子と宋明理学家の書籍が数多く収蔵されており、この研究室の研究に多大な影響を与えている。しかしながら、目録

分類上は、これらの書籍は雑家類の「雜編之屬」（即ち叢書）にかくされてあつて、また集部の別集類及び総集類中と同じくかくされてある。集部別集類を例に取つて言えば、朱子の著作だけでも七種ある。

晦庵先生朱公文集百卷續集十卷別集十卷

明天順四年（一四六〇）刊本

朱子文集百卷續集十一卷別集十卷

明嘉靖十一年（一五三二）刊本

晦庵先生朱文公續集十卷

明刊本

晦庵先生朱文公文集百卷

清康熙二十七年（一六八八）刊本

朱子文集百卷續集十一卷別集十卷

清同治十二年（一八七三）刊本

朱子全書六十六卷

清光緒十年（一八八四）刊本

朱子遺書十二種

清刊本

王陽明の著作は九種ある。

陽明先生文錄四卷詩錄四卷

明嘉靖九年（一五三〇）刊本

陽明先生文錄五卷外集九卷別錄十卷

明嘉靖十五年（一五三六）刊本

王文成公文選八卷

明崇禎六年（一六三三）刊本

陽明先生正錄五卷別錄七卷

明崇禎七年（一六三四）刊本

陽明先生集要三編三種十五卷

明崇禎八年（一六三五）刊本

王陽明先生全集二十二卷

清康熙十九年（一六八〇）刊本

王陽明先生文鈔二十卷

清康熙二十八年（一六八九）刊本

王陽明先生全集十六卷

清道光六年（一八二六）刊本

王文成公全書三十八卷

清刊本

その他の宋明理学者の著作もまた十分に収蔵されており、集部別集類百八十六種の書籍中、宋明理学に關係する者の文集は半数以上を占めている。したがつて、その収集は決して不完全であるとは言えないのであるが、しかし、各部の書籍の内容を熟知していなければ、ただ目録によつて蔵書を見た場合、蔵書の特色を窺い知ることが出来ない。

ある。

しかしながら、別の視点から言えば、この分類統計は目録学の正統な手法によって九州大学文学部書庫の蔵書を分類し、かつ数的な資料を明らかにするものであり、これによって漢学研究者は九州大学文学部の漢籍蔵書の類別と種類数とを知ることが出来る。したがって、もしこれに各書の版本記録を付記すれば、それで十分に完成された研究基本資料となり得るのである。

四、版本の価値判別の基準

この書庫の中国古籍は清版が主で九割を占め、残りの一割を明版が占める。一般的な版本の価値判別基準からすれば、宋元版本が善本であり、明清版はその下である。ただし、これは佞宋癖元の価値基準であり、多くは骨董的な価値から論じられたものであって決して学術的な価値から論じられたものではない。骨董的な価値は時間によるが、学術的価値はその内容による。校勘が精審で収録の完璧な明清版本は、訛誤・残欠が多く不完全な宋元版本より当然価値は高い。また、その時代の人の刻梓や著作は後世の者が前代の者の著作を刻梓したものよりも、当然より原著に近く価値も高い。

以上のことから論ずれば、この書庫の蔵書の価値は宋元版の有無によって決めるのではなく、そこに収蔵される明清版本の内容から判断しなければならない。この書庫の明版本は明人の著した或いは編集した詩文集が最も多い。ただ、九州大学がこれらの詩文集を購入する際にはやはり明代の理学家を主な対象としている。もしこれらを類別すれば、多くは子部儒家類、集部別類、集部總集に属するものである。清版について見ると、清人の詩文別集、總集及び清人の編集した叢書が主である。この事から明らかに言えることは、図書購入に際して文学部が頗る宋明理学と文学の発展とに重点を置いていたと言うことである。尤も、そこに収蔵される明版本中三分の一が宋明理学に関する書籍であり、収蔵される版本の学術的価値について論ずれば、頗る特色のある収蔵であると言えよう。

例を挙げて言えば、前節で述べた王陽明の著作中、二部が明代嘉靖版の刊本である。この他、著作された時代とあ

まり隔たりのない明版及び明人の著作は、集部の中には以下の如くある。

篁邨程先生文集九十三卷外集二卷雜著十卷別集二卷 程敏政撰 正徳二年（一五〇七）刊本

甘泉先生文録選二十一卷 湛若水撰 嘉靖八年（一五二九）刊本

舒梓溪集十卷 舒芬撰 嘉靖三十二年（一五五三）刊本

琦野先生文集三十六卷 呂柟撰 嘉靖三十四年（一五五五）刊本

歐陽南野先生文集三十卷 歐陽德撰 嘉靖三十七年（一五五八）刊本

念庵羅先生文集十三卷 羅洪先撰 嘉靖四十三年（一五六四）刊本

冀州山人四部稿百七十四卷 王世貞撰 萬曆五年（一五七七）世經堂刊本

李氏焚書六卷 李贄撰 萬曆間刊本

子部の中には以下の如くある。

初潭集二十八卷 李贄撰 萬曆間刊本

醒世恆四十卷 馮夢龍撰 天啓七年（一六二七）刊本

五朝小説三百五十七卷 馮夢龍編 明末心遠堂刊本

古今奇觀四十卷 抱甕老人編 明末同文堂刊本

又一部 明末金谷園刊本

龍圖公案十卷 陶煥元撰 明末金院種書堂刊本

忠義水滸全書百二十卷 李贄評點 明末卷本

この他にも、明代の地方誌に、天下一統志九十卷、恩県志六卷、華陰県志九卷等があり、また萬曆間の司礼監の刊本（もとは明代の内府典蔵の大明會典の残本）や萬曆四十年（一六一二）呉興凌氏刊五色套印本の文心雕龍四卷等があり、均しく珍重に値する版本である。

五、結 語

九州大学文学部書庫は開架式を採用しており教官及び学生の閲覧借りだしが頗る多く、そのため漢籍数の完全に正確な統計を取ることは困難窮りない事であった。ただ校外用の目録がまだないことから九大関係者以外でこの書庫を詳しく知る者は少なく漢学研究の公器として充分に活用されていないのは残念なことである。筆者は半年の時間を費やし、文学部書庫の蔵書目録及び明版図録各一部を完成させた。何とかして出版し世に出し、国内外の漢学界に裨益せんことを願ってやまない。

筆者は、一九九二年八月から一九九三年二月まで、「財団法人よかトピア記念国際財団法人招へい研究者」として、九州大学文学部で研究を行った。この半年間の研究中、中国哲学史研究室の町田三郎先生、柴田篤先生、教養部の福田殖先生をはじめ、職員・学生の諸氏に大変お世話になった。ここに厚く御礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 此処に記す統計数は、西暦一九九二年九月～一九九三年二月に筆者が九州大学文学部書庫において実際に見た書籍の数に限る。九州大学文学部書庫は一部の貴重書以外は開放されており借り出し自由である。したがって、上記の期間中に見ることの出来なかつた書籍もあり、実際の蔵書数はこれより若干多い。
- (2) この表に記す種類数は全て重複する書籍は除いてある。したがって、前述の数より少なくなっている。ここで言う重複とは同版本の同一書のことである。もし版本が異なれば分類して数に加えた。
- (3) この史実の例証は数多くあり、例えば、台北市の国立故宫博物院図書館に収蔵される約千種の地方志は抗日戦争終結時に交通部が日本軍より接収したもので、国防研究院を経て現在に至っている。
- (4) この書の子部雑家類はさらに雑学、雑考、雑説、雑品、雑纂、雑編に分かれ、その中で「諸子之學」は雑学に属す。